
南山アーカイブズニュース

NANZAN Archives News

第12号 2019年11月1日

目 次

巻頭言

フォーリーニョ教区の図書館と公文館 ― 閲覧資料から学术论文へー
..... オズワルド・カバラル 2

東海唯一のカトリック病院 三根 久子 3

南山発見

南山大学附属小学校創立 10 周年 松浦 典文 4

「未完」の男子部校舎 水口 裕介 6

アーカイブズの業務 ― 「中学生の職業体験」に寄せてー 永井 英治 7



南山大学附属小学校校舎模型（南山アーカイブズ常設展示室）

フォリーニョ教区の図書館と公文館 — 閲覧資料から学術論文へ —

オズワルド・カバラル

薄暗い閲覧室の机の上に自分の研究道具（ノート PC、デジタルカメラ、鉛筆と手帳）を置き、写本の目録を取りに行き、参考にしたかった写本の請求記号と描写を調べ始めた。カウンターの方の黒犬が閲覧室を静かに歩き回っていた。犬は心配しないで、図書館に慣れていて何もしないと言われた。

1930年頃に作成された目録で、その時期の風潮と学問上の関心を反映し、文学系、地方歴史、聖人伝記の写本の場合、描写は明細で、他の分野では、特に法学系の場合、寸法、頁数、世紀と二行、長くても三行、の描写しかなかった。詳しい目録を自分で作成しなければいけない。カウンターに行き、参照したかった写本を依頼した。席に戻って、隣に座っていた犬の頭を撫でながら「楽しみにしています」と言った。数分で写本が机上に届いた。最初の三つの写本はフォルダに包まれていたが、紐を解くとボロボロの状態、小束は製本されていなくて、使用と閲覧は極めて困難、頁をめくる時にも注意しなければならない。更に、最初の小束の文字色は水か雨かか読めないぐらい消え失せており、紙も破れやすい。数フォリオを見ていると、幸いに文字色は普通の状態に戻ってきて、写真は撮れそうだ。最初の数小束の内容は、ウンブリア地方の法学者が参考や仕事（大学の講義と裁判の活動）の為に書き写した様々なテキストであったが、欄には写本の持ち主の研究ノートが記されていた。第四番目の小束の内容を調べると唯一無二のドキュメントが現れた：15世紀始め頃の教皇庁控訴院（羅語で *Sacra Romana Rota*）の法学者達の助言（羅語で *consilium sapientis iudiciale*、直訳：賢者の法的助言）で、執筆者の封蝋印と署名があった。難しい事件があって、教皇庁控訴院の裁判官は6名の有名な大学教授の助言を求めた。そこにはその助言のオリジナルがあった。何故ここにあるのかと不思議であった。詳しいノートをとるのには時間がなかったので、デジタルカメラでドキュメントの写真を

撮った。助言の始めに事件の問題点（羅語で *punctus*）があった：アッシジのフランシスコの死後、フランシスコ会は二派に別れた。一方はコンベンツアル（やや緩和した規律によって修道する会員）他方は厳修派（戒律を厳守する会員）。上司の許可なし、あるフォルランシスコ会員はコンベンツアルから厳修派の方に移転したが、どうしたら良いか。法学者達の結論によると、移転は可で、あの修道士を罰せなくても良い。興味深い事件で、学術論文の種にもなりそうな気がしたが。閲覧室を出ると、犬は一階の玄関まで着いて来た。「Ciao!」と言った。

ホテルに戻って、教皇庁控訴院の印刷された判決集を調べて（インターネット上の検索は可能）、その中にはこの事件についてと似ている事件について何の情報も出てこなかったの、資料は知られていないから紹介しても良いと考えた。最初の方として撮った写真を見ながら助言全体（6フォリオ、つまり12頁の長さ）を書き写した。二日後、フォリーニョ市からローマに行った。教皇庁図書館で助言を執筆した法学者の伝記と彼らについての参考文献を調べた。彼らの活動と著作についての理解が深くなったが、しかしこの事件とこの助言について何の沙汰もなかった。書きたい気持ちが強くなった。しかし、一つの写本に基づいて助言のテキストを編纂するのは危ないのではないかと考えて、再び自分の書き写しに戻った。今回、筆記者はやや勤勉で、大きな間違いを起こさなかった。法学者の助言で、ローマ法、教会法、他の法学者の作品の引用が多いので、一つずつを調べなければならない。原典批評の比較資料の作成は細かい、長い作業だったが、最初の書き写しに比べるとテキストの長さは二倍以上になった。論文自体を書くより、原典の編集作業に長い時間がかかった。

（南山アーカイブズ館長／南山大学人文学部キリスト教学科教授）

東海唯一のカトリック病院

三根 久子



聖霊病院屋上庭園の聖母マリア

南山学園の設立母体はカトリック神言修道会です。神言修道会は1875年にオランダのシュタイルで、アーノルドヤンセン神父によって創立されました。彼はその後1889年に聖霊奉侍布教修道女会を創立しました。両会の創立者のモットーは、「聖なる三位一体の神がわたしたちとすべての人の心のうちに生きますように」です。すべての人は神の愛の交わりに招かれており、その愛を世界の果てにまで伝えにいくというわたしたちの修道会の独自性が、このモットーに表れています。聖霊会は、神言会来日の翌年、1908(明治41)年に秋田に第一歩を踏み、女学校を開校し、その後も人々のニーズに応じて、教育事業・社会事業・医療事業を展開して行きました。

社会福祉法人聖霊会 聖霊病院は、東海地区唯一のカトリック病院です。1945年(昭和20年)第2次世界大戦終結直後、戦争で焼け野原になった名古屋において、自分たちが宣教のために派遣された日本で難渋している人々に助けの手を伸べようと、医療・医薬に事欠く状態の人々のために、ドイツ人修道女によって開設されました。2名の医師と4名の修道女で始められたこの病院の創立目的は、医療を通してすべての人々に神の愛を伝えることでした。最初の修道女たちは、心と身体の苦しみに耐えている人々を力づけ、慰め、励まし、そのためには、どんな苦勞もいといませんでした。自分たちの自由な時間や休む場所すらなく、夜は倉庫や階段の下などに

休んだようです。戦争ですべてを無くされた方々だったので、医療のために出すお金はなく、たくさんの人たちが救いを求めて来院したそうです。病院創設からの理念は「愛と奉仕」です。この「愛と奉仕」の精神は、現在も受け継がれ、病院の中で生かされています。

聖霊病院の独自性として、カトリック的活動分野が、病院の組織の中に一部署として位置づけられていることがあげられます。それが「カトリック社会事業室」です。創立者のモットーや病院の理念の中に語られるキリスト教の精神を維持していくことが、この部署の目標です。つまりキリスト教では、人間を神に造られたものとして、「尊厳」つまり人間として、かけがえのない価値あるものとして理解しています。全職員が、このような人間の尊厳をしっかりと把握し、患者さんをはじめとして、出会う一人ひとりを大切に、尊重しつつ、関わりを持つことができることを目標としています。

主な業務の一つとして、パストラルケアを挙げることができます。パストラルケアは、患者さんやその家族、スタッフの精神的ケア、宗教的ケアを常に視野に入れながら、スピリチュアルケア(魂のケア)をおこなうことです。このパストラルケアが業務の中心であると言っても過言ではないでしょう。これらのことは、聖霊病院の創設当時の方々の精神を引き継ぐものだからです。このカトリック社会事業室の運営は、現在も、聖霊会会員がおこなっていますが、それを今後も継続し、東海地区唯一のカトリック病院としての特色を失わないよう努めていきたいと思えます。



聖霊病院正門

(聖霊病院カトリック社会事業室室長)

南山発見

南山大学附属小学校創立 10 周年

松浦 典文

2018年度は、南山大学附属小学校の創立10周年を記念する年度でした。2016年度に創立10周年記念事業企画委員会を立ち上げ、26のアイデアの中から10の企画の実行を決めました。2017年度に創立記念事業実行委員会を立ち上げて準備を進め、2018年度終了までに、10の事業全てを実行しました。実行に当たっては、保護者会・同窓会（有言会）から資金援助も含め全面的なご支援をいただきました。感謝・感謝・感謝です。

実行した事業は以下のとおりです。

①記念ロゴマーク・キャッチフレーズの制作

児童からアイデアを募集し、デザイナーに仕上げていただきました。これを10周年記念の様々な場面に使いました。式典の舞台の背後に掲げたり、記念品に入れたり、手提げ袋に印刷したりといった具合です。



ロゴ&キャッチコピー

②スチューデントコートへのメダリオン設置

南山大学附属小学校宗教施設のデザインを監修した師イエズス修道女会のシスター北爪に原画制作を依頼し、オーミ陶業に陶板として焼き上げていただきました。スチューデントコートに設置し、2018年度の始業式後に除幕式を行いました。やさしく、あたたかな雰囲気が表現されています。南山小の雰囲気です。

③ヤンセン師ライネルス師ゆかりの地への巡礼

2018年8月3日（金）から10日（金）まで、西脇校長の引率で、在校生・卒業生とその保護者60名が、南山学園の設立母体である神言修道会発祥の地であるシュタイル（オランダ）を訪れ、修道会創立者の墓前で10周年を報告しました。南山学園創立者ゆかりの地ノ



メダリオン

イヴェルク（ドイツ）も訪れ、学園創立者の霊性の源を学びました。初代校長のハンス ユーゲン・マルクス師が同行してくださいました。また、ヴァチカン（イタリア）を訪問しました。



巡礼旅行

④記念誌の発行

神言会の創立・南山学園の歴史を含め、戦時下にあった南山小学校から現在の南山大学附属小学校の歩みを100頁にまとめました。

この冊子がまとまったのは、大勢の方々のご協力のおかげです。様々な善意にふれ、大変感激しました。編集は、2名の保護者のお力無くしては成り立ちませんでした。

取り組みの中で、南山小学校に在籍された方の声をあらためて伺うことができました。「もう一度あの頃に戻りたいと思いました。」「私の長い人生でも、一番幸せな時だったと思います。」という言葉から、南山小が如何によりよい学校だったか分かります。南山大学附属小学校も、その精神を受け継いで、よりよい学校を目指します。



10周年記念誌

⑤ 10周年の記念歌制作

児童から歌詞のアイデアを募集し、記念歌を制作しました。折にふれて歌い、10周年をお祝いしました。

⑥ 南山小歌集・CD制作

10周年の記念歌を含め、南山小で作詞・作曲されたオリジナルソングを児童の歌唱で録音し、CDにまとめました。その楽譜集も作成しました。



記念CD

⑦ 10周年記念グッズ

聖堂写真と10周年記念ロゴマーク・キャッチコピーを入れた写真立てをつくりました。



記念品

⑧ ホームカミングデー

卒業生に母校に来てもらい、謎解きゲームや、懐かしいランチの試食を提供しました。



ホームカミングデー

⑨ 記念式典・芸術鑑賞会

愛知県芸術劇場コンサートホールにて、記念式典と芸術鑑賞会「高嶋ちさ子 12人のヴァイオリニスト」を開催しました。



式典

⑩ 在校生向け特別企画

業者にイベントの企画をお願いし、小学校の中に非日常の楽しい空間を創り出しました。



在校生特別企画

(南山大学附属小学校副校長)

「未完」の男子部校舎

水口 裕介

男子部が新校舎となって2年が経過しようとしている（2018年度末現在）。環境としては新たなスタートをしてしばらく経ったということになる。ようやくその良し悪しがわかってきたところである。旧校舎と比べて大きく変わった部分は次のようなものがある。各教科が今後の授業をどのようにしていきたいのかを何度も深く話し合い、その結果としてプロジェクター一体型の電子黒板が常備された特別教室の環境が整ったこと、広くきれいになった廊下や教室、玄関に入るとすぐに図書館があるといったこと、などである。旧校舎で慣れ親しんだステンドグラスは随所で引き継がれ、校舎を彩っている。

しかし、完成から2年が経過して感じるのは、実は「完成」はないのかもしれないということである。例えば、校舎完成当初は予算の関係で中庭（一般的には「なかにわ」だが男子部では「ちゅうてい」と呼びならわしている）がアスファルト敷きであったり、掲示板や展示棚など「知的好奇心」を刺激するような物品が少なく、学びの雰囲気を作ることができない状況であった。それらは現在までの間で次々と姿を変えている。社会科のかねてからの希望であった南山大学人類学博物館との連携が進み、展示スペースへの展示棚の設置、そして博物館からの出張展示の実現にまでこぎつけた。現在は博物館実習の一環として定期的に南山大学の学生たちによって展示替えがおこなわれている。高大連携の1つの姿である。社会科推薦図書を選定し、その読破を表彰する掲示も整い、図書館を「知性を育てる場」・「知の拠点」として活用しようとしている。さらに、社会科掲示板ではニュージーランド留学者の現地レポートを紹介することで、国際的視野への刺激もおこなうようになっている。なお、2018年度は中庭に人工芝がはられ、体育の授業はもちろん、休み時間でも元気に走り回る生徒の姿が見られるようになった。

よりよい教育環境の実現へ向けた工夫は現在も続いて

いる。特に、WiFi環境整備の必要性に見られるように、教育現場に求められるものは常に変化している。大学では当たり前となった情報通信機器の活用がいよいよ中高でも当たり前になってきている。今後、コンピュータや人工知能（以下AI）を作る安い下請けとして働くか、コンピュータ・AIを活用して働く側になるか、労働環境は大きく二分される予想も立てられている。情報機器の活用や情報を適切に扱う能力、新しい価値を見出したり、創造力を働かせたりすること、新たなことを学び続けることは今後の社会で必須の力だろう。時代の変化に目をやり、どういった教育活動を展開するか、南山教育を通してどのような力が身についていくのかを考え、そのために必要な環境を整えていくことが急務である。



南山大学人類学博物館による出張展示のようす

今ある環境を最大限に活かしているかと言えば、まだまだ工夫の余地はあるだろうし、環境そのものも「完成」を目指して変化を続けるだろう。男子部の教職員が「南山らしさ」を残しながらも、時代の変化にいかに応じるか、思考を巡らせ創造力を発揮しなければいけないことは言うまでもない。そこに生徒たちの柔軟な発想も加えた上で、男子部がどんな姿で「完成」に向かっていくのか、期待を込めつつ、業務の間のちょっとした時間でも社会の変化を学び、考えなければと感じている。

（南山高等学校・中学校男子部教諭）

アーカイブズの業務 —「中学生の職業体験」に寄せて—

永井 英治

アーカイブズの主要な機能のひとつに、アーカイブズの設置母体から非現用となった業務文書の移管を受け、これを整理して利用に供するという業務がある。しかし、日本のアーカイブズ認識の現状では、特定のテーマに関する資料を網羅的に収集することに関心が集まっているようである。この場合、アーカイブズと称することの特徴は、網羅的に収集することと、モノとしての価値があまりないものを敢えて収集し、アーカイブズとして整理することで新たな資料的価値を与えることであり、これらが今までの「コレクション」的発想とは異なっている。とくに、アーカイブズとして収集された資料には、網羅的なことから収集者の関心という偏りが生じにくいという利点がある。この点は、実は非現用となった業務文書についてもあてはまる。もちろん何が非現用文書となって移管されるかはいろいろで、非現用という基準自体が一定の偏りを生じさせる可能性もある。それでも、すべての業務文書を現用として業務の現場で保管することができないことを想定すれば、非現用文書からもどのような業務が行なわれていたかをおよそ考えることは可能であろう。

南山アーカイブズの場合、南山学園および各単位校で非現用となった業務文書の移管と、南山学園および各単位校の歴史に関する資料の収集を行っており、これは2種類のアーカイブズの機能を併せ持つものである。とはいえ、南山アーカイブズの利用実績からみると、南山学園および各単位校の歴史に関する資料の展示・保管場所の機能が主な役割となっているように思われる。これは、非現用となった業務文書も見方を変えれば当該組織の歴史に関する資料として利用できることを示している。とくに移管された非現用文書が多く集積されてくると、そのような利用が可能になる。

こうなると、非現用文書を移管する目的は当該組織の歴史を知るためとなってしまうかねないが、現在のアー

カイブズ学はそればかりではないことを明らかにするために活動していると言っても過言ではない。

たとえば、南山学園の歴史は一学校法人の歴史ではなく、アジア・太平洋戦争期の学校教育や宗教の置かれた環境を示す歴史でもある。南山アーカイブズは「南山」のためだけのアーカイブズではないといえる。このことが真に有効になるためには、南山アーカイブズの利用資格に制限はないことを周知させる必要がある。それと同時に、「利用できる」とどまるのではなく、実際に「利用する」ことが行なわれなければならない。ただし、残念ながら、南山学園の構成員であっても南山アーカイブズのことを、図書館や博物館ほどには知らない人がいることも否定できない。

ここに、アーカイブズは重要な業務として広報活動に取り組む必要が出てくる。南山アーカイブズのことばかりでなく、アーカイブズそのものについての社会的認知を得ることがなお課題となっているのである。ここでいう広報活動は、文字通りのそれだけでなく、さまざまな事業を通してアーカイブズについての理解を得ることが期待される。

2018年度から南山アーカイブズは、以上のような意図の下、中学生の職業体験を受け入れることにした(2019年1月23・24日、名古屋市立駒方中学校2年生5名を受け入れた)。2日だけの少数を対象にした活動であるが、アーカイブズというよくわからない施設にやってきた中学生にアーカイブズとは何かを考える機会を用意しようという訳である。

職業体験であるから、アーキビストの業務を経験してもらうことが本筋であり、そのように準備しなければならないが、実際にはいくつもの制約がある。まず、非現用となった業務文書の整理は基本であるが、未整理の業務文書の中には、注意していても個人情報情報が紛れ込むことがある。とくに、個人情報についての認識が乏しい時

期の文書となれば、なおさらである。また、南山アーカイブズがその特性上、多くの学校資料を扱うことは当然であるが、学校には教職員だけでなく、児童・生徒・学生がいる。彼／彼女らの顔写真もまた公開すべきでない個人情報である。とくに旧教職員からの寄贈資料は写真資料が含まれていることが多く、それらを資料として利用できるようにするためには、撮影年月日や被写体、撮影者についての情報が必要とされるが、そのような情報を調べるために写真資料を調査するとき、個人の顔は重要な情報である。しかし、これが個人情報であるため、調査を進めることはできないし、職業体験として扱ってもらうこともできない。中学生に体験してもらうことができるのは、内容がわかっていて、なおかつ作業が終了していない文書に限られる。南山学園の場合、これに日本語資料という制約が加わる。今回、実際に整理してもらったのは、南山短期大学と名古屋聖霊短期大学の入試広報印刷物である。これらは、「入学案内」のように一括して記録されていたので、その内訳として、どのような印刷物があるかを1冊毎に記録してもらった。地味な作業であるが、中身は同じでも表紙が違う印刷物を別個に記録する作業は、それほど単調ではない。

いまひとつ時間をかけたのは資料の写真撮影である。これも、印刷物の撮影となると、無反射ガラスを使用してセッティングする必要があり、大掛かりな作業となる割に撮影量は限られる。効率だけを重視するのではないことを知らせるのも意味があるが、限られた時間での経験となるから、成果を実感してもらいたい。そこで、名古屋聖霊短期大学の卒業記念品などを撮影することにした。ただし、その実際においては、永井は撮影した画像データが図録その他に利用できることを第一に考えていたが、途中で交代したカバラル館長の方針は資料写真に必要な条件を考えるという相違があった。

職業体験が授業になると中学生は関心を維持できないかもしれないし、職業体験の趣旨にそぐわないのではないかと考えたのであるが、アーキビストとして資料の写真を撮るときに重要なことは、やはり資料写真を撮影することである。実際には、その作業は完結しなかったが、アーキビストとして資料に接する態度は、やはり、資料写真を撮るということにある。資料を保存するアーカイブズという施設のあり方を知ってもらうためには重要な認識である。

職業体験の締め括りには、小学生の展示見学の補助となるクイズの作成を行なった。対象を小学生と限定したのは、彼／彼女らが中学生であり、小学生であった時期から遠くないという理由による。また、南山学園の歴史展示を素材とするので、南山大学附属小学校以外の児童にも関心が持てるかもしれない戦中期を対象とした。南山アーカイブズは「南山」のためだけに存在するのではないという課題は今後に残された。

駆け足となってしまった職業体験であるが、2日間という時間を考えると、むしろ内容を精選すべきであったかと思う。また、「体験」にこだわって作業することに重点を置いたが、アーカイブズという謎の施設に来ているのであるから、もう少し丁寧な解説を行なうべきであったかもしれない。仄聞するところでは、作業ばかりの職業体験は不評とのことなので、授業形式に近づくことも許されるのかもしれない。いずれにせよ、アーカイブズがどんなところか少しでも知ってもらうことができれば、「中学生の職業体験」受け入れの意図は果たされたことになる。

しかし、これで小文を終えてしまう訳にはいかない。アーカイブズで「中学生の職業体験」を受け入れたということは、中学生の未来の職業にアーキビストという可能性が追加されたことを意味する。そのためには、彼／彼女らが職業を選択するときにアーキビストという選択肢が存在しなければいけないのである。さらにそのためには、アーカイブズという存在が社会的に認知され、専門職としてのアーキビストが必要不可欠とされる社会が実現していなければならない。「職業体験」で日本のアーカイブズの現状に言及するのは、少なからず辛い。

(南山アーカイブズ/南山大学国際教養学部)

南山アーカイブズニュース 第12号

Nanzan Archives News

発行日 2019年11月1日

編集・発行 南山アーカイブズ

名古屋市昭和区五軒家町6番地

印刷 常川印刷株式会社

名古屋市中区千代田二丁目18-17